

関西支部シニア会活動報告

行事名	本年度第1回 通算第20回 機械・産業遺産ツアー
開催日時	2019年11月26日(火) 14:00~17:00
場所	(株)モリサワ 大阪市浪速区敷津東2-6-25
参加人数	シニア会員 21名 (申し込み22名)
行程	14:00 現地集合 見学会開始 14:00-14:30 会社概要説明 14:30-16:30 「文字の歴史館」見学 16:30-17:00 質疑応答
内容と感想	<p>1) 会社の概要と歴史</p> <p>ユーザーサポート部 シニアマネージャー 村辻博見氏より説明を受けた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・創業者の森澤信夫氏が1924年に「邦文写真植字機」を世界に先駆けて発明し、1925年に特許を取得した時から同社の歴史が始まる。 ・活字印刷では文字の大きさ毎に異なる活字を用意しなければならず、アルファベットでは文字によって活字の幅が様々であるのに対し、漢字・かなでは全て同じ大きさの四角形の中に収まるように出来ているため、写真を用いた縮小・拡大が容易であることの気づいたことが写真植字機の開発につながった。 ・オフセット印刷の普及に伴い、同社の写真植字機の事業も伸び、機構の改良、欧文への適用、マイコン制御の導入、コンピュータ化などの技術開発が進められた。 ・1980年代になると、デジタルフォント・画像、情報技術が飛躍的に進歩し、印刷・出版がDTP(デスクトップパブリッシング)に移行し、印刷産業は大きな変革期を迎えた。 ・1980年代初頭、アドビシステムズ社はPostScript言語によるグラフィックソフトウェアで、アップル社はMacintoshというハードでDTPの先陣を切っていたが、日本語処理のノウハウを持っていなかったため日本市場には入れていなかった。 ・モリサワは、DTPの将来像が未だ明確でなかった1987年にアドビシステムズ社と提携した。これが現在、同社がDTP、デジタルフォントの分野で先導的な現在の地位を築く要因となった。 <p>2) 文字の歴史館の見学</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村辻氏、深水氏のアテンドで同社の「文字の歴史館」の見学を行った。 ・初期の写真植字機からコンピュータ制御された写真植字機、現在のデジタルフォント作りに至るまでの技術と装置が展示されていて技術の流れが分かった。 ・歴代の写植機の展示場所では、オフセット印刷の仕組みについて原稿・版下などの実物を示しながらの説明により印刷工程がより理解できた。 ・1980年代に製作されたブラウン管搭載、マイコン内蔵型の写植機を実際に稼働させながらの機構、使用法の説明があった。(写真1は、当該機(右)と初期の写植機(左))があり、写植の機構について理解できた。 ・聖書、解体新書などの書籍の他、アルファベット圏、漢字圏の文字や印刷に関わる貴重な文物も展示されており、文化圏の違いによる文字の歴史と特徴の一旦を知ることができた。(写真2は、見学風景) ・また、活字の世界に対し、写植、更にはデジタルフォントを定着させてきた同社の技術のよって、文化圏、文字の違いを超えた情報発信が可能になった経緯を知ることができた。 <p>(所感)</p> <p>周辺の技術動向、社会情勢の変化に対応しながら、創業当時の「文字」に拘った事業を発展させてきた状況を見ることができ、「特徴ある技術を有する企業見学会」の趣旨に沿う見学会となったと思量する。</p>

写真1 初期の写植機（左）と マイコンを内蔵した発展形



写真2 文化圏ごとの文字の変遷の見学風景



写真3 集合写真

